

源氏物語

白宮卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

匂宮

紫式部

與謝野晶子訳

春の日の光の名残花ぞのに匂にほひ薫かをると

思ほゆるかな

(晶子)

ひかるきみ

光君がおかくれになつたあとに、そのすぐれた美貌びぼうを継ぐと見える

人は多くの遺族の中にも求めることが困難であつた。院の陛下はおそれおおくて数に引きたてまつるべきでない。今の帝みかどの第三の宮と、同

じ六条院で成長した朱雀院すざくの女三によさんの宮みやの若君ふたりの二人がとりどりに美貌の名を取っておいでになって、実際すぐれた貴公子でおありになったが、光源氏がそうであつたようにまばゆいほどの美男というのではないようである。ただ普通の人としてはまことにりっぱで艶えんな姿の備わっている方たちである上に、あらゆる条件のそろつた身分でおありになることも、光源氏にやや過ぎていて、人々の尊敬している心が實質以上に美なる人、すぐれた人にする傾向があつた。紫夫人が特に愛してお育てした方であつたから、三の宮は二条の院に住んでおいでになるのである。むろん東宮は特別な方として御大切にあそばすのであるが、帝もお后きさきもこの三の宮を非常にお愛しになつて、御所の中へお住居すまいの御殿も持たせておありになるが、宮はそれよりも気楽な自邸の

生活をお喜びになつて、二条の院におおかたはおいでのなるのであつた。御元服後は三の宮を兵部卿の宮と申し上げるのであつた。女一によいちの宮みやは六条院の南の町の東の対たいを、昔のとおり部屋へやの模様変えもあそばされずに住んでおいでになつて、明け暮れ昔の美しい養祖母の女王にようおうを恋しがつておいでになつた。二の宮も同じ六条院の寢殿を時々行つてお休みになる所にあそばして、御所では梅壺うめつぼをお住居に使つておいでになつたが、右大臣の二女をお嫁めとりになつていた。次の太子に擬せられておいでになる方で、臣下が御尊敬申していることも並み並みでなくて、その御人格も堅実な方であつた。

源右大臣には何人もの令嬢があつて、長女は東宮に侍していて、競争者もないよい位置を得ているのである。下の令嬢はまた順序どおり

に三の宮がお嫁りめとになるのであるろうと世間も見ているし、中宮ちゆうぐうもその
お心でおありになるのであるが、兵部卿の宮にそのお心がないのであ
る。恋愛結婚でなければいやであると思っておいでになるふうなので
あつた。夕霧の大臣も同じように娘たちを御兄弟の宮方に嫁とつがせるこ
とを世間へはばかっているのであつたが、もし懇望されるなら同意を
するのに躊躇ちゆうちよはしないというふうを見せて、兵部卿の宮に十分の好意
を見せていた。大臣の六女は現在における自信のある貴公子の憧憬どうけいの
的になつていた。

六条院がおいでにならぬようになつてから、夫人がたは皆泣く泣く
それぞれの家へ移つてしまつたのであつて、花散里はなちるさとといわれた夫人は
遺産として与えられた東の院へ行つたのであつた。中宮は大部分宮中

においでになつたから、院の中は寂しく人少なくなつたのを、夕霧の右大臣は、

「昔の人の上で見ても、生きている時に心をこめて作り上げた家が、死後に顧みる者もないような廃邸になっていることは、栄枯盛衰を露骨に形にして見せている気がしてよろしくないものだから、せめて私一代だけは六条院を荒らさないことにしたいと思う。近くの町が人通りも少なく、寂しくなるようなことはさせたくない」

と言つて、東北の町へあ的一条の宮をお移しして、三条の邸やしきと一夜置きに月十五日ずつ正しく分けて泊っていた。二条の院と言つて作りみがかれ、六条院の春の御殿と言つて地上の極樂のように言われた玉うてなの台もただ一人の女性の子孫のためになされたものであつたかと思え

て、明石夫人^{あかし}は幾人もの宮様がたのお世話をして幸福に暮らしていた。夕霧はどの夫人に対しても院がお扱いになったとおりに、皆母として奉仕しているのであるが、紫の女王がこんなふうに院のおあとへ残っておいでになれば、どんなに自分は誠意をもってお尽くしするこ
とであろう、終わりまで特別な自分の好意というものを受けてもらえ
るというようなことはなかったと思うと、今も大臣は残念でならぬよ
うに思うのであった。

天下の人で六条院をお慕いせぬ者はなくて、何につけても火が消え
たように思つて歎^{なげ}かぬおりはないのであった。まして院に親しくお仕
えしていた人たち、夫人がた、宮がたが院にお別れした悲しみに流す
涙というものはどれほどの量であるかしのれないのである。それとも

に今も紫夫人を追慕する思いはだれにもあつて、人からその女王の思
い出されていない時というものはないのである。春の花の盛りは短く
ても印象は深く残るものであるというべきであろう。

二品にほん みやの宮の若君は院が御寄託あそばされたために、冷泉院れいぜいの陛下が

ことにお愛しになつた。院の後の宮も皇子などをお持ちにならずお心

細く思召おぼしめしたのであつたから、この人をお世話あそばして老後の力に

したいと望んでおいでになつた。元服の式も院の御所であげられた。

十四の歳であつた。その二月に侍従になつて、秋にはもう右近衛うこんえの中

将に昇進した。推薦権をお持ちになる位階しようじよの陞叙もこの人へお加えに

なつて、なぜそんなにお急ぎになるかと思うようにずんずんと上へお

進ませになるのであつた。お住居の御殿に近い対をこの人の曹司ぞうしにお

あてになつて、装飾などは院御自身の御意匠でおさせになり、若い女房から童女、下仕えの者までもすぐれた者をお選り^よととのえになつた。人が姫君をかし^{かしや}ずく以上の華奢な生活をおさせになるようでもばゆく見えた。院のおそばの女房の中からも、後の宮の女房の中からも容貌^{ようぼう}のすぐれた、感じのよい、品のある女は皆中將の曹司付きにあそばされ、院にいることがどこにいるよりも好きになるようにとお計らいになつたのであつて、うれしい玩具品^{がんぐひん}のように思召すのであつた。亡^なくなつた太政大臣の女御^{によご}の腹からただお一方の内親王がお生まれになつたのを、院が非常に珍重あそばすのに変わらず中將をお扱いになるのである。それは一つは後の宮をお愛しになることが年月とともに増してゆくことによるものらしくて、それほどまでにはと話を聞いて

は人が信じないほど中將を院はお愛しになった。

現在の母宮は仏勤めをばかりしておいでになって、月ごとの念仏、年に二度の法華ほっけの八講、またそのほかのおりおりの仏事などを怠らずあそばすだけがお役目のようで、出入りする中將をかえって御自身のほうが子のように頼みにしておいでになったから、お氣の毒でおそばにもいたかつたし、院からも、宮中からも始終と呼ばれはするし、東宮も御弟の宮がたも親友のように思召していつしよにお遊びになろうとされるしするため、暇がなく苦しい中將は一つの身を幾つかに分けて使うことができぬかとさえ歎息たんそくしていた。時々耳にはいつて、子供心にも腑ふに落ちず思ったことは、今も不可解のままで心に残っているが、尋ねる人もなかった。宮にはそうした不審をいだいているとさ

えお思われすることのはばかられる問題であつたから、ただ自身の心のうちでだけ絶え間なくそのことを考えて、

「どういうことから自分が生まれるようになったのか、何の宿命でこんな煩悶はんもんを負つて自分は人となつたのか、善巧ぜんぎょう太子はみずから釈迦しやかの子であることを悟つたというが、そうした知恵ちえがほしい」

と独言ひとりごとをする時もあった。

おぼつかなたれに問はまし如何いかにして始めも果ても知らぬわが身ぞ

返事はだれもしてくれない。自身の健康などもこんなことでそこ

なつてゆくような気がして中將は歎なげかれるのであつた。宮がお年の若
盛りに尼におなりになつたのも、いったいどれほどの信仰が
おありになつたために、にわかに出家を断行あそばされたのか、
自分の生まれてくることが不祥なことであつたために、厭えん世せい的なお
気持ちにもなられたのであろう、人がその秘密を悟らずに
いるとは思われない、暗闇くらがりに置くべき問題であるから
自分には人が告げないのであろうと中將は思つた。
朝暮あけくれ仏勤めはしておいになるようではあるが、
確固とした信念が
おありになるとは思えない女の悟りだけでは御仏みほとけの救いの手も
おぼつかない、五つの戒めも完全に保つておゆきになれるかも疑問な
のであるから、自分がその精神だけを補うことにして、後世だけでも
御安樂にしてさしあげたく思つた。この人はお崩れかくになつた院も、自

分というもののために不快な思いにお悩まされになったかもしれないと、次の世界でももう一度お逢いしたいという望みが起こり、元服して社会へ出ることを厭わしがつたのであるが、意志を通すこともできなくて、出仕する身になった時から、八方のはなやかな勢いがこの人を飾ることになっても、これはうれしいとは思われないで、ただ静かな落ち着いた人になっていた。帝も母宮の御縁故でこの中將に深い愛をお持ちになったし、中宮はもとより同じ院内で御自身の宮たちといっしょに生い立って、いっしょにお遊ばせになったところのお扱いをお変えにならなかった。

「末に生まれてかわいそうな子です。一人前になるまでを自分が見てやることもできない」

と、院が仰せられたことをお思いになつて、あわれ憐みを深くかけておいでになるのである。夕霧の右大臣も自身の公達きんだちよりもこの人を秘蔵がつて丁寧^{ていねい}に扱うのであつた。昔の光源氏は帝王の無二の御愛子ではあつたが、嫉妬しつとする反対派があつたり、母方の保護者がなかつたりして、そうめい聡明な資質から遠慮深く世の中に臨んでおいでになつて、一世の騒乱になりかねぬようなことになつた時も、いさぎよく自身で渦中かちゆうを去り、宗教を深く信じて冷静に百年の計をされたのである。この中將は若年ですでにあらゆる条件のそろつた恵まれた環境に置かれていた。そしてそれに相当した優秀な男子でもあるのである。仏が仮に人として出現されたかと思われるところがこの人にあつた。ようぼう容貌もどこが最も美しいというところはなくて、目を驚かすものもないが、ただ

艶で貴人らしくて、賢明らしいところが万人に異なっているのである。この世のものとも思われぬ高尚な香を身体に持っているのが最も特異な点である。遠くにいてさえこの人の追い風は人を驚かすのであった。これほどの身分の人が風采をかまわずにありのままで人中へ出るわけはなく、少しでも人よりすぐれた印象を与えたいという用意はするはずであるが、怪しいほど放散するに忍び歩きをするのも不自由なのをうるさがって、あまり薫香などは用いない。それでもこの人の家に蔵われた薫香が異なつた高雅な香の添うものになり、庭の花の木もこの人の袖が触れるために、春雨の降る日の枝の雫も身にしむ香を放つことになった。秋の野のだれでもない藤袴はこの人が通ればもとの香が隠れてなつかしい香に変わるのであった。こんなに

不思議な清香の備わった人である点を兵部卿の宮は他のことよりもう
らやましく思召おぼしめして、競争心をお燃やしになることになった。宮のは
人工的にすぐれた薫香をお召し物へお焚たきしめになるのを朝夕のお仕
事にあそばし、御自邸の庭にも春の花は梅を主にして、秋は人の愛す
る女郎花おみなえし、小男鹿さおしかのつまにする萩はぎの花などはお顧みにならず、不老
の菊、衰えてゆく藤袴、見ばえのせぬ吾木香われもこうなどという香のあるもの
を霜枯れのころまでもお愛し続けになるような風流をしておいでにな
るのであった。昔の光源氏はこうしたかたよったことはされなかった
ものである。

源中將は始終宮の二条の院へお伺いするのであって、音楽の遊びの
行なわれる時にも優越を誇るような笛の音を吹き立てる相手を、互い

に好敵手と認める若いどうしであつた。世間も黙つてはいなかつた。
匂におう兵部卿、薰かおる中將とやかましく言つて、すぐれた娘を持つ貴族た
ちはこの貴公子たちを婿に擬して、好奇心の起こるようにしむける者
もあるのを、宮は相手の女の価値を相当なものと考えられる人へは手
紙を送つてごらんになつて、なお細かく相手を観察しようとされるの
であつた。しかも熱心にだれを得なければならぬと思ひになる女は
なかつた。冷泉院れいぜいの女一いの宮みやと結婚ができたらしいであらうと匂にお
宮みやが思ひになるのは、母君の女御も人格のりっぱな尊敬すべき才女
であつて、姫君もさもあるはずにすぐれた評判をとつておいでになる
方だからである。遠くからの評判だけではなく匂宮は姫宮のおそばに
いる女房から細かな御様子を聞いてもおおいでになるのであつたから、

忍びがたく恋のようにも今ではなっていた。

中将は人生を味気ないものと悟っているのであるから、寂しいからといって、恋愛などをしては、かえってこの世を捨てる際の妨げになるであろうということを知っていて、保護者との関係の煩瑣はんさな女性に求婚するようなことははばかれるのであった。自身では永久にこの冷静な態度が続けられるものと思っていたであろうが、それはただ現在の薫中将が熱情をもって愛する人がないからであろうと思われる。親兄弟の同意せぬ恋愛結婚などはまして遂行すべくもない薫である。十九になった歳としに三位の参議になって、なお中将も兼ねていた。帝も後も愛を傾けておいでになる人で、臣下としてこれ以上幸福な存在はないと見られる薫ではあるが、心の中には純粹な六条院の御子と思わ

れぬ不幸な認識がひそんでいて、樂天的にはなれない人で、貴公子に共通な放縱な生活をするようなことも好まなかった。静かに落ち着いたものの見方をする老成なふうの男である人からも見られていた。兵部卿の宮の恋が年とともに態度の加わる院の一品いっぽんの姫宮も、一つの院の中にいる薫には、ことに触れて御様子が変わりもするのであって、評判どおりに優秀な御素質の貴女らしいことを知っては、こんな方を妻にできれば生きがいを感じることであらうと思うのであるが、院が御実子同然な御待遇を薫に与えておいでになるものの、姫宮との間だけは嚴重にお隔てになるのを知っては、しいて御交際を求めにゆく気にはなれないのであった。自分ながらも予期せぬ恋の初めの路に踏み入るようなことがもしあつては、宮のためにも、自身のため

にもよろしくないと思つて、親しもうとは心がけなかった。

人に愛さるべく作られたような風采ふうさいのある薫かおるであつたから、かりそめの戯れを言いかけたにすぎない女からも皆好意を持たれて、やむなく情人関係になつたような、まじめには愛人と認めていない相手も多くなつたが、女のためには秘密にするほうがよいと思つて、皆蔭かげのことにしておいて、無情だと思われぬ程度にだれの所へも人目を紛らして通つて行くのを、女のほうではかえつて気が詰まるように苦しく思い、薫の誘うままに三条の母宮の所へ女房勤めに集まつて来るのが多くなつた。冷淡な態度を始終見せられているのも苦痛ではあつたが、絶縁されるよりはと心細い恋人たちは思つて、女房勤めをする身分でない人々もこうして薫とはかない関係が続けることで慰んでいるので

あつた。さすがになつかしい、目に見るだけでも情感を受けられる人であつたから、どの女もしいてみずからを欺くようにしてこの境遇に満足していた。

「宮様の御存命中は毎日お目にかかることを怠らないつもりだから」

と薫中將は言っていた。こんなふうの人であつたから、夕霧の右大臣もおおぜいある娘の中の一人は匂宮へ、一人はこの人の妻にさせたという希望は持っていた。言いだすことをはばかっていた。なんといつても内輪どうしのことであつて、世間の聞こえもおもしろくないとは大臣も知っているのであるが、この二人のすぐれた貴公子に準じて見るほどの人もない世の中ではしかたがないと考えられるのであつた。雲井くもいの雁夫人かりの生んだ娘たちよりも藤典侍とうてんじにできた六女はす

ぐれて美しく、性質も欠点のない令嬢なのであった。劣った母に生まれた子として世間が軽蔑^{けいべつ}して見ることを惜しく思つて、女二の宮が子供をお持ちになることができずに寂しい御様子であるために、六の君を大臣は典侍の所から迎えて宮の御養女に差し上げた。よい機会に二人の公子に姫君の気配^{けはい}をそれとなく示したなら、必ず熱心な求婚者になしうるであろう、すぐれた女の価値を知ることがは、すぐれた男でなければできぬはずであると大臣は思つて、六の君を後の候補者というような大形な扱い^{おおぎよう}をせず、はなやかに、人目を引くような派手^{はで}な扱いをして貴公子の心を多く惹^ひくようにしていた。

御所の正月の弓の競技のあとで、左大将でもある夕霧の大臣の家で宴会の開かれるのを、大臣は六条院ですることにして匂宮にも御来会

を願っていた。賭弓かけゆみの席には皇子がたの御元服あそばしたのは皆出ておいでになった。后腹きさきばらの宮は皆氣高けだかくお美しい中にも、風流男みやびおの名を取っておいでになる兵部卿の宮はやはりすぐれて御風采ふうさいがりっぱにお見えになった。第四の皇子は常陸ひたちの太守でありになるが、この方は更衣腹こういばらで、思ひなしかずつと見劣りがされた。例のことであるが勝負は左ばかりが勝ち続けた。例年よりも早く競技は終わって左右の大將は退出するのであったが、匂宮、常陸の宮、后腹の五の宮を大臣の大將は自身の車へいっしょにお乗せして帰ろうとした。薰は負け方の右中將で、そつと退出して行こうとしていた車を、大臣は、

「宮様がたがおいでになるお送りにおいでにならないか」

と言つてとどめさせて、子息の衛門督えもんのかみ、権中納言ごん、右大弁そのほか

の高官をそれへ混ぜて乗せさせて六条院へ来た。

やや遠い路みちを来るうちに雪も少し降り出して艶えんな氣きのする黄昏時たそがれどきで

あつた。笛などもおもしろく吹き立ててはいって行つた。六条院は、

ここ以外にはどんな御仏みほとけの国でもこうした日の遊び場所に適した所は

ないであろうと思われた。寝殿の南の庇ひさしの間の端に定例どおり中將が

南向いて席につき、北向きに主人の座に対して来会者の親王がた、高

官たちの席が作つてあつた。酒杯が出て夜がおもしろくなつたところに

「求子もとめこ」が舞おさわれた。左の手で抑え、右の手で抑えて幾度か袖そでを斜め

にするこの時の風の動きに庭の梅の香がさつと家の中へはいつてき

て、源中將が身に持つにおいを誘うのも艶な趣のあることであつた。

わずかな透き間からのぞく女房なども、

やみ

「闇はあやなし（梅の花色こそ見えね香やは隠るる）」という時間にもあの方のにおいだけはだれにだってわかります」

と言つて薫をほめていた。大臣もそう思つていた。容貌も風采も平

生以上にまたすぐれて見える薫が行儀正しく坐ざしているのを見て、

「右近衛うこんえの中将も声をお加えなさい。あまりに客らしくしているでは

ありませんか」

と言うと、感じのよいほどの中音で、「神のます」など、求子もとめこの一ふしをうたつた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
